

SNS 時代の肖像権とスナップ撮影 ～「作家性」と同様に大事な「どう映るか」問題～

佐々木広人 (編集者/元『アサヒカメラ』編集長)

スマホと SNS 全盛の時代にスナップ写真を楽しむにはどうしたらよいか? というテーマでお願いした連載の最終回。佐々木広人氏によれば「若者たちは、まったく違ったルールで肖像権を考えている」。我々とは別の価値観を持っている人にカメラを向けるのだから、相手を知らなければトラブルは必至。さらに、写真家と被写体という当事者ではない、写真を見た第三者の感想も影響しているといえます。かつてのスナップ写真の議論とは大きく違います。現在の若者の「肖像感」を解説していただきます。(著作権委員会)

昨年 (2022 年) 12 月の中旬、高校 3 年生の記者が書いた記事が SNS で話題になった。タイトルは「友達との思い出写真は「加工後の顔」ばかり 元の写真も残せば…高校生の後悔」。記事は「高校生新聞 ONLINE」(運営: 株式会社スクールパートナーズ) が「Yahoo! ニュース」で配信した。もともとは昨年 11 月に「高校生新聞 ONLINE」で配信されたものだったが、1 か月後に「Yahoo! ニュース」で配信されたところ、約 24 時間で 1300 件を超えるコメントが寄せられたのだ。

記事はこんな書き出しで始まる。

<Instagram やツイッター……私たちは日々、SNS を使っています。そんな中、当たり前のように戸惑いなく写真加工する人が多いのでは。加工写真があふれかえる今こそ、加工技術の使い方を見直してみませんか? >

写真の加工によってノートの複写が見やすくなると言及する一方、過度に加工した風景写真と実際の光景との違いに落胆した話に触れ、こう続けている。

<加工すればかわいい顔や美しい顔、若く見える顔、面白い顔にできます。(中略) ただ、私は自分たちの顔を加工した写真ばかり残した結果、中学時代の同級生との思い出写真では、お互いの元の顔が見えなくなってしまいました。元の写真を残しておけばよかったと後悔しています>

リアリズムを重視する写真家や愛好家ならば、この感想を読んで「快なり!」と膝を打つかも知れない。スナップ撮影の復権とばかりに喜ぶ人もいるだろう。普段は辛口な意見が目立つ「Yahoo! ニュース」のユーザーコメントも概ね好意的。私自身もこのニュースを読んで、「ストレートなスナップ写真を見直すいい機会だ」と Twitter に感想を投稿したぐらいだ。

●自分の画像を加工する女性は「7 割超」

では、このエピソードから若者たちの肖像権意識に何らかの大きな変化が起きていると言えるのか。

ここで話を少し前に戻したい。私は前回 (会報 178 号) の連載で、写真の加工を当たり前だと捉える若者たちの肖像権意識について言及した。

大雑把に言えば、こういうことだ。

SNS 時代に育った若者たちは、我々が想像する「リ

アルな自分」のほかに「人前でさらすためのリアルな自分」が存在し、「リアルな自分」をさらすことに非常に抵抗感がある。さらにアバターやメタバースの普及によって、その動きは加速するだろう。その結果、肖像権に対する年配者と若者の捉え方に解離が進んでいくに違いない——という話だ。

では、この高校生新聞の記事を契機に、若者たちが写真の記録性を重んじ、リアルな素顔をさらす機会が増えていくのだろうか。

経済評論家の門倉貴史さんは「Yahoo! ニュース」で、15～49 歳の女性を対象にしたアンケート調査 (2022 年 3 月) を引用し、こうコメントしている。

< SNS に自分の画像をアップする際、加工する人の割合は 7 割を超えていた。若い世代を中心に画像を加工することや加工済みの画像を SNS で共有することはすでに一般化しつつあるといえるだろう >

●「ナチュ盛り」で肖像権意識は変わる?

やはり事はそう単純ではなさそうだ。だが私はあるコメントに注目した。

< アメリカの 10 代には「盛れない」SNS が流行し始めており、Z 世代の加工への考え方に変化が訪れていると考えられます >

「Yahoo! ニュース」にこうコメントしたのは、IT ジャーナリストの鈴木朋子さんだ。

< 顔加工はプリントシール機に始まりアプリでも行わ



筆者も人気のアプリ「SNOW」で自撮り写真を加工してみた (写真右)。確かに「写真の記録性」はどこへやら、である。

れるようになりました。動物の顔になるエフェクトが大流行した頃は、スマホの標準カメラで撮影することを「現実カメラ」と呼ぶ高校生も。その後、「ナチュ盛り」などさりげない加工が流行し、現在は標準カメラの方がいいと言う人達も増えています>

辞書サイト「Weblio」によると、「ナチュ盛り」とは化粧に関する用語で「ナチュラルに盛る」ことを指すという。若者たちが写真の過度な加工に飽きたのかどうかは定かではないが、自然な演出を選択する機運が高まっているとみていいだろう。

この鈴木さんの「ナチュ盛り」の指摘は、前出の高校生記者の「思い出写真でお互いの元の顔が見えなくなってしまった」という言及と併せて考えると実に興味深い。

「ナチュ盛り」の代表例は、すっぴんに近い（と思わせる）自然な感じで美しく演出されたメイク術だという。

ここで注目したいのは「自然な感じで美しい演出」。そこには「美しさ」を一定程度維持したいという意思が存在する以上、明け透けな素顔を積極的にさらそうというものではない。だから、ストリートスナップなどで、ハプニングに驚いて衝撃を受けた表情や、意図せず浮かべた苦悶に満ちた表情を撮られることはもちろん想定外だ。

肖像権が侵害されるか否かの分水嶺としては、最高裁が2005年に示した判断がある。それは「被撮影者の人格的利益の侵害が、社会生活上受忍の限度を超えるかどうか」。「自然な感じで美しく」ありたい若者たちの感覚からすれば、この肖像権侵害の基準は「話にならない」ほど低いだろう。

もし撮影した写真に若者たちが映り込んでいて、それが法的には「セーフ」だったとしても、若者たちは「受け入れ難い姿をさらされた」と感じ、それこそSNS上で異議申し立てをする可能性もある。あるいは縁もゆかりもない人たちが写真を見て異議申し立てをすることもあり得るだろう。

そう、SNS時代の表現で最も難しいのは、第三者への配慮にある。不特定多数の目にさらされることで当事者間の問題が「外野」の声に振り回され、事態が悪化してしまうのだ。

●批判やクレームより怖いもの

前々回（会報177号）の本連載でも触れたとおり、『アサヒカメラ』の読者投稿写真がSNSで「炎上」したのも、被写体になった人たちの告発ではなく、第三者の書き込みがきっかけだった。

スナップ写真を撮影するにあたり、被写体あるいは映り込んだ人物に配慮する写真家は多い。だが、SNS全盛のこの時代に最も留意したいのは、展示・拡散した作品が第三者にどう受けとめられるかという点だ。

『アサヒカメラ』の編集長時代、写真家と最も議論を重ねたのはこの点であった。写真家としてはその1枚を通して見せたい作品性がある。だが、その1枚が読者の嫌悪感を催すきっかけにならないか、作品の世界観を曲解・誤解させないか。編集者としては当然、そ

こをケアする。もちろん読者の作品の理解力によるところは大きいし、「批判なら甘んじて受ける」と豪語した写真家もいた。あえて強調しておくが、多くの編集者はクレームが怖いのではない。むしろ読者に作品性がきちんと伝わらないことのほうが怖いのだ。インターネット社会では、曲解・誤解に伴うものであろうと、ひとたび貼られた負のレッテルを消すのは容易ではない。熱心な好事家が集う写真展や写真集とはワケが違う。

だが、その写真集や写真展でさえ、今やSNSによる告知・宣伝が欠かせない。もはやどの媒体・場所であろうと、発表する作品は不特定多数の第三者の眼差しにさらされるものだと考えるべきなのだ。

●いま一度考えたい「どう映るか」問題

もっとも、写真家自身が「不特定多数の第三者の眼差し」で作品を吟味できるかもしれないが、私としてはおすすしめない。写真家は作品への情熱や思いが強く、第三者の立場にはなりにくい。そこは編集者やキュレーター、デザイナーなどを挟むことが望ましい。それもSNS事情に精通した人ならなおいい。

これは小説や音楽の世界でも同様だ。素晴らしい作品を世に送り出すにも、優れたプロデューサーや編曲家・編集者を挟むことができれば、作品性を損なうことなく伝えられるどころか、いっそう鮮やかなものに昇華させることだって可能だ。

ところで、以前から感じていたことだが、写真・カメラの界限では「何を（何で）撮ったか」の話題が多く、それが人々の目にどう映るのかについての議論が乏しかったように思う。この議論を活性化することで、肖像権問題への誤解はもちろん、写真家の作品への曲解は多少なりとも減るのではないかな。

スマートフォン利用者が増えたこともあって、今や写真に触れる人口は有史以来最多のはずである。この状況を「1億総写真家時代」と指摘したメディアもあったが、この先は「1億総写真評論家時代」になる可能性も否定できない。思い込みや誤解・曲解に左右されない議論を通じ、健全な写真文化を育むためにも、写真を語る開かれた場が欲しいところだ。そして日本写真家協会こそがその主導役を果たすべきではないだろうか。（完）



佐々木 広人（ささき・ひろと）

株式会社キュービック エディトリアルデスク・ゼネラルマネージャー／株式会社アーク・コミュニケーションズ取締役／専修大学文学部講師。朝日新聞社・朝日新聞出版で『週刊朝日』副編集長、『アサヒカメラ』編集長、『AERA dot.』編集長などを務めた後、2021年8月より現職。2012年新語・流行語大賞トッペンを受賞した「終活」の発案者でもある。

※会報174号「著作権研究」（連載49）「写真の公衆送信の基本的な考え方」に誤植がありましたので訂正します。P.35 左段24行目誤）「犯罪を知った日から〜」（正）「犯人を知った日から〜」